

# 図書館通信 — 42 —

1977. 11

## いろいろの問題

館長 渡辺安夫

附属図書館の充実と発展のために並々ならぬ御尽力をいただいた中沢前館長のあとを非力なわたしがお受けしてから4ヶ月が過ぎ去りました。これまではどちらかというと一利用者の立場で図書館のことを考えていたように思いますが、7月以降は当然これまでとは別の角度からも考えざるを得なくなり、それに応じて図書館の姿もまた従来とはやや異ったかたちで浮かびあがってきました。

大谷の土地にこの図書館が落成し開館してからはほぼ10年の歳月が流れようとしています。その歳月の間に図書館には幾つかの問題が胚胎してきたのではないかと思います。そのなかの或るものは図書館の本質にもかかわる基本問題であり、その処理の如何によってはあとあとまで長く禍根を残しかねないようにも見うけられます。十分な審議をつくり慎重に対応しなければならぬ問題と、それほどしなくてもよい謂わば派生的な問題を見極める必要があるように考えます。

長い間くりかえしとりあげられている問題の一つに「延長開館」の問題があります。現在は前・後期の試験期に（平日は午後5時から7時30分まで、土曜日は12時から午後4時まで）延長を実施し、平常時の開館日の昼休みには職員が交替で窓口サービス（貸出・返却）をするようにしています。前者は以前から実施されているものであり、後者は昨年度から新たに実施するようになったものです。附属図書館は本来研究と教育の実をあげるために設けられた施設、機関であり、その目的を実現するために必要な諸方策をつねに探求しつづけなければならず、その実現をばむ障壁があればそれをすみやかに除去しなければならぬことはいうまでもないことであります。「延長開館」の問題もおそらく図書館がより充分にその目的を達成するために考えなくてはならぬ問題であるがために繰返し現われてくるのではないかと考えます。天野、石塚、上野、中沢等、館長の任にあたられた諸先生方が「図書館通信」等でこの問題に言及されてこられたのもまたその理由からと推察します。そして、この問題を論ずるときにいつも決まったように出てくるのが予算上の問題であり人手不足の問題です。年間を通じて平常日にも延

長開館を実施するためには何よりも先ず定員増と予算増が先決条件であるというのは、歴代の館長が一致して述べておられることであります。43年と44年には試験期以外にも試みに3ヶ月間実施していますが、そのときの各月の入館者数が一日平均3.2人、16人、26.5人であったことも、延長の実施をためらわしている要因になっているように見えます。わたしたちもまた、この古くして新しい問題に取組もうとしていますが、現在図書館は御承知のように増築工事の真最中であり、既存の約4,500㎡に対して完了時には約7,600㎡の面積に増加するわけですが、そのとき現在の人員でどれくらいの事務量、作業量を消化しなければならないのか十分な見通しをもつことが困難な状況におかれています。これらの諸事情を考慮しながら図書館本来の目的、任務を遂行する最も効率的な方策はどのようなものであるのか考えなくてはならないと思います。

中沢前館長が前号で詳細に述べておられますように、そのほかには本館と分館の関係、資料室や図書室の問題、情報文化時代における図書館の在り方等多くの問題が横たわっていますが、そのなかの一つである附属図書館の諸予算に関する問題もまた「延長開館」の問題と同じように古くして新しい問題です。維持費や設備費の負担の方法や示達額の配分方法をめぐって歴代の図書館委員の方々がどれだけ多くの時間と労力を費されてきたことか、「図書館通信」に掲載のこの10年間の「委員会報告」を拜見しただけでもその御苦勞のほどを察することができます。図書館は断るまでもなく全学共通の部局であり、ひとしく研究と教育と言ってもその内容、方法はそれぞれ著しく異なり、図書館の活用の仕方も当然各学部、教養部において異ったものになるだろうと思われまふ。図書館の各種の予算に関する考え方も差異がでてくると思いますが、委員会での慎重な審議を通じてなるべくはやい機会に解決できるよう願っています。

ここでは紙面の制約から触れることが出来なかった諸問題につきましても、いつかとりあげたいと思っています。

## 日本語の書き言葉

谷本 誠 剛

もうしばらくになるが、総合雑誌の文章をとらえて、なぜもっと分りやすく書かないのか、思考が生煮えの人ほど難解な悪文であると論断したのが中野好夫氏であった。（「朝日」）それはなるほどと思われる論旨であったが、日本語の書き言葉についてのこの指摘は、ある意味で学問のあり方そのものにもかかわってくることであろう。少しこのことを考えてみたいと思う。

中野氏が例にあげている文章を見ると、その読みづらさの一つは、漢字を用いた抽象的な名詞の多用と、いくんだ構文の難解さにたどれるようである。そして、ここにある問題は、結局日本語の書き言葉がどの程度まで話し言葉とのつながりを持ちうるかということにかかってくるように思われる。抽象的な日本語の名詞がおおく明治の頃に、西洋語を漢語に翻訳することでできたことはよく知られている。ということは人工的な日本語の書き言葉は、話し言葉のレベルとは断絶したところで作られたということで、このことは、「不条理」「実存」「悟性」といった名詞を、absurd, existenz, understanding というもとの言葉におきなおしてみるとはっきりすることである。もとの西洋語が明らかに日常生活語の延長線上にあるのに対して、日本語のそれは話し言葉とほぼ断絶していて、それだけに実に分りにくいのである。そしてこのレベルでの書き言葉の改善策の一つは、「悟性」や「認識」といった言葉よりも、可能なかぎり「わかること」といったより用言的な日本語を用いるというのであろう。それはまた、視覚的に秀れた漢字は、しかし、耳に聞いてどの程度混乱なしに伝わるかという基準からも制限されねばならないということにもなるはずである。話し言葉のレベルを離れるということにもなりうるわけで、学問の世界であっても、いまはたしかに難解な観念語のカーテンのかけで安閑としている時代ではない。

ただ、それでも明治の先達が、西洋語をこのような漢語に置きかえたには、いまにも通ずるそれなりの必然があったはずなのである。抽象的な漢語を用いることで西洋的な論理思考はたしかに容易になるのであり、またその時文章はそれ自体としてしまるものともなる。例えば「後進地域のナショナリズムは、必然的に欧米化への対抗性の契機を持つ」（菅孝行「週刊読書人」）といった文章には、やはりそれなりの文章美を認めねばならない。それに日本語の話し言葉自体が論理的徹底

性に欠けるうらみがあるというのも事実で、そのことの身近な例は、例えば、「（漁業補償問題は）やらねばならない」「（検事は）起訴をやめたらどうですか」といった新聞の引用記事のあり方にも伺える。それは当事者の言葉をそのまま引用符でつなぐだけで記事になる英語のそれなどとはやはり対照的なのであり、放送講演が活字になってそのまま密度の濃い論述になっているといった芸当はやはり日本語ではやりにくいのである。

結論は結局中間にしかありえないことになるが、ただ平易明快な文章でなお高度の論理的思考は可能だということは中野氏にならうて云うべきであろう。例をとると、柳田国男の格調があつてなお達意な文章がまず浮ぶ。それに、不下順二氏の「だが悪ふざけや下品さとはおよそ無縁な兄弟どもで彼等はあつて」とか「時として病的なものにまで誇張して見せたものでそれはあつた」（「ドラマの世界」）といった主語と述語を近づける工夫もおそらく意識的になされているのだろうということも思いつく。ついでに、中野、柳田、木下といづれも文学や民族学でイギリスにかかわった人に平易明快な文章が多いようなのは、これはドイツ流の観念論の移植の上になつたこれまでの学界の主流のあり方とは対照的な、現実主義的な姿勢と云えるのかもしれないとも思うのである。最後に、最近ひどいと思った例を一つ。「一種類の品物あるいは実体の多様性すべてを包括する言葉は一般名辞と呼ばれ、種概念の一つを表現する言葉は特殊名辞と呼びます」（「イギリス幼児教育史」）これがベスタロッチ主義にたつメイヨアの幼稚園での実践例の翻訳だということである。

（教養部・英語）

### ■教官著作寄贈図書（本館）

中村博保（教育学部）

「鑑賞日本古典文学第35巻 秋成・馬琴」

中村幸彦等編 中村博保等執筆（角川書店 昭和52）

岡部政裕（人文学部）

「あが・わが考」（静岡大学人文学部国文談話会 昭和52）「余意と余情—表現論への試み—」（塙新書37）（塙書房 昭和46）

「萬葉集大成第七巻 様式研究篇・比較文学篇」

岡部政裕等著（平凡社 昭和29）

篠田知和基（教養部）

「ネルヴェルの生涯と文学—失われた祝祭—」

（牧神社 昭和52）

静岡大学電子工学研究所

「10年の軌跡 オプト・エレクトロニクスの発展をめざして」（静岡大学電子工学研究所 昭和51）

<以下P. 3右下へ続く>

## 私のすすめたい本・32

## 応用微生物学の立場から

山田 雄三

“私のすすめたい本”と云うことで何か一文をとすすめられたが、難しいことになったと内心、困ってしまった。現在の筆者の専門は応用微生物学であるが、この仕事の暇な折、あるいは、忙しいさなかに、それから逃れるように活字に目を通すことが多い。その際の書物は、手当たり次第で、その折々の興味のおもむくまゝに目を通すのみである。それは、まったくの雑多で、本来ならば、その中から“私のすすめたい本”を選び出すべきであるが、一介のアマチュアに過ぎないこととて、どうも気持ちがよくない。その雑多の方面には、しかるべき専門家がおられるので、いきおい筆者の“商売上”の範囲を越えないことになってしまう。そうなると、対象は農芸化学料の学生にかぎると云うことになるのであるが。

※ A. L. Lehninger, “Biochemistry”. 2nd Ed. Worth Publishers, Inc. (1975)

生化学関係の書物として、立派なものである。今までのどの本に比べても、内容のしっかりした広範囲にわたったもので、一驚に値する。大きな書物であるから、全部の読破は大変なことだと思う。講義のあった部分に相当する章を少しずつ読んでいくと、いつの間にやら、と云うことになるが。第1版には日本語の訳本(“生化学”)も出ているが、経済的に大きな負担となるので、第2版の原著がよい。また、Lehningerの文章も、ほれぼれするものであると、英語には素人である筆者は感じる。この本を読んでいると、生命が誕生して30億年、生命の基本的機構が、まぎれもなく、1本の線で連なっていることの不思議さを感じさせる。

F. Jacob and E. L. Wollman, “Sexuality and the Genetics of Bacteria”.

Academic Press, Inc. (1961).

第二次大線後、生物学は大きく変貌したと伝えられる。Watson and CrickのDNA modelが物理化学屋の手によってなされたとするならば、もう一方の大仕事は、まさしく、生物屋の手によってなされたと考えるのは間違いであろうか。筆者はこの中に20世紀の“種の起原”を見る。筆者は、現在まで、この原著を読む機会を持たず、もっぱら、岩波書店の日本語訳※“細菌の性と遺伝”であるが、epoch-makingな書物として、すすめたい。

※ R. Bachsbaum, “Animals Without Backbones.” Penguin Books (1951).

その昔、筆者の教養部学生時代のある日、書店で

この本を見出し、2冊からなるこの本を早速買い込み、夏休みのある時期、集中的に辞書をひきひき読み下したことがある。この本は今でも書店で売られているであろうか。副題に、an introduction to the invertebratesとあり、なかなか要領よくまとめられていた。日本に、このような類の本があるか否か、私は知らない。こゝに盛られた内容は、生物学が化学および物理学の手を借りずに、まさに生物学そのものの力によってのみ、問題解決をなした古き良き時代を彷彿させる。前二者の書物が、地球上に無数に存在する生物を縦の線で結ぶものとすれば、こちらは横の線で飾りつけるものと考えられるが。最後に酒の本を2つ。

※ 坂口謹一郎, “世界の酒” 岩波新書 (昭和32年)  
同じく、※ 坂口謹一郎, “日本の酒” 岩波新書 (昭和39年)

坂口先生の“世界の酒”は版を重ねることの古い本である。近年のワインブームの先駆的な本であると考えられる。この本は、地名がさかんに出てくるので、読みづらい面もあるが、ヨーロッパ旅行の折など、携えて行けば、ひとしおに感ぜられる。坂口先生のお若い時の文章のゆえか、はぎれよく、さわやかに思われるのは、あながち、筆者一人のみではないであろう。一方、“日本の酒”は多少専門的である。そして、理屈っぽくなっている。この本2冊を読めば、とくに、“微生物利用学”の醸造の部は、講義からカットしてもよさそうである。最近では、さらに焼酎ブームとかで、小鹿の酒屋さんの店頭あたりに、九州各地の焼酎が並べられるようになってきた。これには、福満武雄氏の“焼酎”が面白い。九州、福岡の葦書房が出版元の“ぱびるす文庫”である。これらの本を読んでいると、“酒はさわやかに飲むべきである”ことが痛感される。(農学部・応用微生物学) (※は本館所蔵)

< P. 2からの続き >

坂本重雄 (人文学部)

「労働法入門」(有斐閣新書) 中山和久・岸井貞男・門田信男・深山喜一郎・山本吉人・坂本重雄共著 (有斐閣 昭和51)

「官公労働基本権の法構造」(労働旬報社 昭和52)

※以上の図書は12月末日まで運用係カウンターに備えつけてあります。御利用下さい。

< P. 4からの続き >

鳥取西高等学校 「鳥取西高百年史」昭和48(376.4/To 74/1)  
同 「鳥取西高百年史—資料編」昭和48  
(376.4/To 74/2)

中央学院大学 「発展への序章 中央学院大学十年史」  
昭和51(377.21/C 66)

早稲田大学 「稿本 早稲田大学百年史 第1巻中・下」  
昭和49/50(377.21/W 41/1(2・3))

## — 最近の受贈図書から —

## 学校史・誌関係

このリストは、昭和52年4月から9月までの間に受け入れた図書の中から、学校史・誌関係のものを取り出して学校名のABC順に配列したものです。書名は「」で示し、書名の先頭に見出しと同じ学校名がくるものはそれを省略しました。( )は請求記号です。※は現在整理中のものです。

- 愛知学院大学 「愛知学院百年史」 昭和52 (377.21/A 23)  
 大東文化大学 「五十年史」 昭和48 (377.21/D28)  
 広島大学 「二十五年史 包括校史」 昭和52 (377.21/H173)  
 " 「二十五年史 部局史」 昭和52  
 北海道大学 「写真集北大百年 1876-1976」 昭和51  
 (377.21/H82)  
 北海道教育大学 「函館分校 創立六十年史」 昭和50  
 (377.33/H 82)  
 同 「札幌分校 創立九十年史・開学二十七年誌」 昭和51 (377.33/H 82)  
 法政大学 「経済学部五十年誌」 昭和50 ※  
 市邨学園 「七拾年史」 昭和51 (377.21/I 51)  
 慶応義塾大学 「工学部三十五年史」 昭和49 (377.21/Ke26)  
 熊本大学 「教育学部附属小学校 百年の歩み」 昭和50  
 (376.2/Ku 34)  
 同 「教育学部同窓会創立百周年記念誌」 昭和49  
 (377.21/Ku 34)  
 明治学院大学 「明治学院百年史 資料集 第3.4集」  
 昭和51 (377.21/Me 25/3・4)  
 名城大学 「小史」 昭和51 (377.21/Me 25)  
 三重大学 「教育学部創立百年史」 昭和52 (377.21/Mi15M)  
 名古屋大学 「理学部二十五年小史」 昭和42 (377.21/N27)  
 名古屋工業大学 「東海のほまれに一名古屋工業大学七十年史」 昭和47 (377.35/N 27 T)  
 日本聖書神学校 「三十年」 昭和51 (190.7/N 77)  
 日本歯科大学 「60周年誌」 昭和46 (377.34/N 77)  
 旅順工大 「旅順の日(旅順工大同窓会60周年記念誌)」  
 昭和48 (377.35/R 96)  
 琉球大学 「農学部22年の歩み—創立から国立移管まで—」  
 昭和48 (377.21/R 98)  
 札幌医科大学 「創基30年史」 昭和50 (377.34/Sa 68)  
 関目学園 「二十五年史」 昭和50 (369.06/Se 33)  
 静岡大学 「工学部50年史」 昭和48 (377.21/Sh 94)  
 ソニー学園 「ソニー学園の歴史—高等学校十年の歩み—」  
 昭和51 (376.4/So 42)  
 東京医科大学 「写真でみる東京医科大学60年」 昭和51 ※  
 東京教育大学 「附属豊学校の教育—その百年の歴史—」  
 昭和50 (378.2/To 46)

<以下P. 3右下へ続く>

## ■学生購入希望図書

下記のリストは、今年4月から9月にかけて学生から購入希望のあった図書のうち、購入が決定したものです。購入希望図書の用紙は各階の投書箱横に備えてあります。予算・収書基準の許す範囲で希望にそいたいと考えておりますので、せいぜいお申込み下さい。なお購否等の図書館からの回答は3階カウンター横の掲示板にその都度掲示しますので御注意下さい。

- 「学習版・資本論 第1巻第1分冊①」カール・マルクス著 宮川実訳 (あゆみ出版)  
 「解析学序説」梶原壤二著 (森北出版)  
 「現代の森田療法 理論と実際」高良武久監修 大原健士郎編集 (白揚社)  
 「日本公債論」鈴木武雄著 (金融財政事情研究会)  
 「古代オリエント史」モスカーティ著 鈴木一州訳 (講談社)  
 「法律学における学説」宮沢俊義著 (有斐閣)  
 「ニューギニア中央高地」京都大学生物誌研究会編 (朝日新聞社)  
 「倉橋由美子全作品 全8巻」(新潮社)  
 「対人恐怖の人間学」内沼幸雄著 (弘文堂)  
 「複合汚染その後」有吉佐和子著 (潮出版)  
 「電気回路論入門上・下」デソー、クウ共著 松本忠訳 (ブレイン図書出版)

## ■附属図書館委員会報告(昭和52年度)

- (第2回)とき: 52.5.23 ところ: 本部  
 (1) 昭和52年度附属図書館維持費予算案について、審議の上これを原案どおり承認した。  
 (第3回)とき: 52.7.15 ところ: 本部  
 (1) 昭和52年度指定図書購入費の各学部、教養部の負担額について、検討の上これを承認した。  
 (2) 本省から示達のあった学生用図書購入費の本館、分館、各短大及び大学院への配分について、試算額を検討の上これを了承した。

## 〈お知らせ〉(本館)

- (1) 冬期休暇中の長期図書貸出について  
 貸出冊数: 4冊まで  
 貸出日: 12月5日(月)~10日(土)  
 返却期限: 1月13日(金)  
 ※なお、11月28日(月)~12月3日(土)の間の通常貸出については、その返却期限をすべて12月5日(月)とし、長期図書貸出期間(12月5日~10日)は通常貸出を停止します。  
 (2) 休館  
 12月21日(水)~1月4日(水)  
 (3) 後期試験のため、開館時間を延長します。  
 期間: 1月17日(火)~2月25日(土)  
 時間: 月~金 17:00~19:30  
 土 12:00~16:00